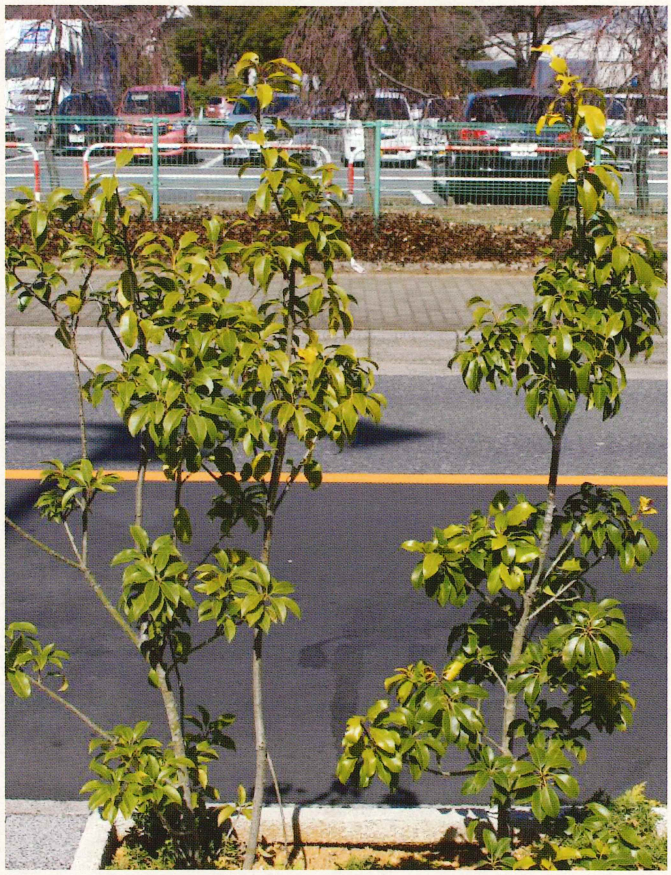
樹里安だより

2024年
Vol.44

＼植木屋さんの／ おすすめ植物 その9 ソヨゴ



ソヨゴってどんな植物？

育てやすく柔らかな樹形が魅力の常緑樹。暑さ、寒さ、日照不足など厳しい環境でも育つ強健さを持ち、初夏に白い花、雌株は秋に赤い実を付ける。生長が遅いため幼い苗木から成木へは時間がかかるが、樹形を維持する手間が少ないメリットがある。また、仕立て方により雰囲気が変わるため、和洋問わず様々な場所で活躍する木である。

川口市公園紹介記 その9

「たな ボタニカル」なフィールド・ミュージアム

～川口市立グリーンセンター～

「日本の都市公園100選」に選ばれた名園 中島 健 設計

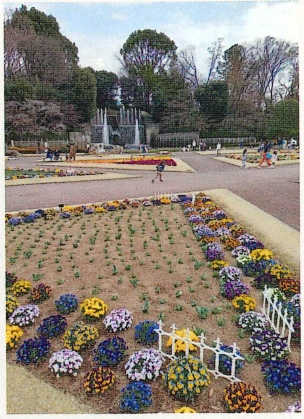
東京メトロ南北線に直結、埼玉と東京・神奈川を結ぶ地下鉄「埼玉高速鉄道」愛称埼玉スタジアム線。この新井宿駅から徒歩10分ほどの所に今回ご紹介する名園があります。

江戸幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』(1830年完成)の中に、「新井宿村は江戸より行程五里、…正保の改には伊奈半十郎・荒川又六郎知行、…此村今は…民戸二十五、東は赤山に接し、南は浦寺村…東西三町許、南北十一町に餘れり、村の西の方日光御成道係れり、…」と記述されています。この「新井宿村」の一画に現グリーンセンターが位置します。当村は、赤山に居を構えた関東郡代伊奈氏の領地で、歴史の道としての「日光御成道」・将軍ロードが村中を通っているという、歴史的な背景がこの古典籍から垣間見えます。

当園の前身は、昭和21年(1946)農業振興のために設立された埼玉県の指導農場。昭和35年(1960)「川口市農業センター」として新設され、昭和42年(1967)11月に「グリーンセンター川口市立花木植物園」として開園しました。その後名称変更され現在に至っています。約15ヘクタールの園内には、花壇広場、滝・大噴水、大集会堂、日本庭園茶室、大芝生・白鳥の池、山野草園、芝生広場、昆虫の森、冒険の森、ちびっこ広場などの施設と共に多種多様な植物が随所に見られます。

雑木林の原風景を活かした園内

平成元年(1989)年7月、多くの人々に愛されている名園の証として「日本の都市公園百選」に選定されました。さらに、平成12年(2000)年5月5日、「21世紀に残したい・埼玉ふるさと自慢100選」にも名を連ねています。


中島 健の造景ビューポイント

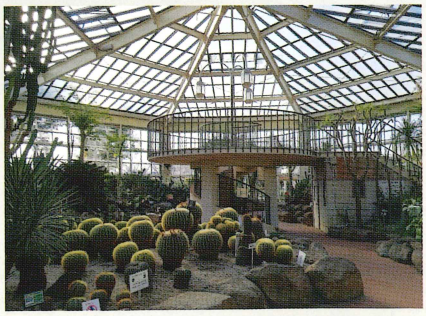
公園全体の設計は、東京農業大学で教鞭を執った造園家で作庭家の中島 健氏(1914-2000)。氏は、関東ローム層からなる大宮台地の堅牢な高台とそこに入り込む低地が織りなす自然地形を巧みに活し、武蔵野の雑木林の風情など当地の原風景を尊重。自らの庭園デザインに取り入れ設計に当たっています。「人々が長い時間滞在したいと感じる、リラックスできる空間創り」が、中島氏の造園コンセプトとされています。

氏の作品は、神奈川県大磯町にある吉田茂邸庭園(1960年)、井深大箱根別邸庭園(1971年)や田中角栄、河野一郎邸など政財界の要人の邸宅の庭をはじめ、日本芸術院会館庭園(1957年)、皇居新宮殿庭園(1962年)、在ローマ日本文化会館庭園、モントリオール万国博覧会日本館庭園など世界各国で日本庭園を設計・作庭。その数は国内650か所以上、海外20ヶ所以上に及んでおり、このあまりにも著名な実績は世界の人々の知るところとなっています。昭和44年(1969)代表作川口市立グリーンセンターで、「日本造園学会賞計画設計作品部門賞」受賞という栄誉に輝いております。

大温室(キング&クイーン) 秀逸なブルータリズム建築

1950～60年代に流行した、粗野な印象が特徴のコンクリート打ち放し・ガラス張りの建築。「ブルータリズム建築」と呼ばれ、東京上野にある前川國男(1961年)設計の「東京文化会館」が代表格です。70年代に一度衰退しましたが、近年世界中で、再評価の潮流が見られ注目を浴びています。何と園内に、このブルータリズム建築が見られます。熱帯植物、サボテンを展示している八角形王冠型をした2棟の「大温室」です。昭和49年の開園当初の建物で、グリーンセンターのランドマークとしての存在感を絶妙に醸し出してい

ブルータリズムの真骨頂 大温室


大温室(サボテン温室)内部

ます。(＊現在は閉館)設計は伊藤喜三郎氏(1914-1998)。病院建築の分野で著名な建築家で、慶応義塾大学病院、三楽病院他を手掛けています。市内西青木にある「体育武道センター」も氏の作品です。

2022年、日本を代表する建築家で新国立競技場の設計をした隈研吾氏の作品で、フランスパリ西郊ブローニュの森の南にある「アルベール・カーン美術館」がリニューアルオープンしました。この敷地内にあるフランス庭園の中に、ドーム型の美しく瀟洒な熱帯温室があります。こちらの建物の建築年代は19世紀と異なりますが、どことなく、グリーンセンターの大温室を彷彿とさせる雰囲気が漂っています。

ブルータリズム建築としての「大温室」は、過去に建築史の専門家から「この時代を物語る秀逸な建物」との評価を受けております。

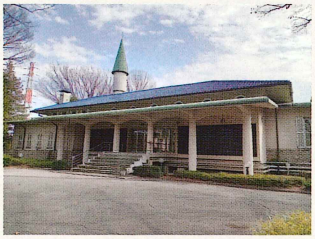
フランス アルベール・カーン美術館　熱帯温室

皇室の迎賓館として使われた 大集会堂(シャトー赤柴)

庭園から臨む大集会堂

フランスのベルサイユ宮殿を彷彿とさせる、幾何学的シンメトリックな洋風庭園を前庭にもつ大集会堂は、開園前の昭和42年(1967)年4月30日に竣工しました。同年9月、埼玉県で行われた「第22回国民体育大会」に列席する、皇太子・皇太子妃(現上皇ご夫妻)が宿泊された由緒ある建築です。

この建物は、鉄筋コンクリート造2階建。横方向のラインが冴え渡る瀟洒な正面ファサードに、童話の世界の「おとぎの国」に登場するような、とてもユーモラスな尖塔を屋根に持つ特徴が窺えます。この尖塔は、鋳物工場のシンボル「キューポラ」をかたどった通気口です。また、建物の内外諸所には、各種鋳物を駆使した意匠が見られます。特に、玄関のドアノブや窓枠上レリーフ、バルコニー欄干、排気口グリルなどのデザインが、ひときわ目を引きます!こちらの建物も大温室の設計者伊藤喜三郎氏の作品です。


大集会堂のファサード

これからの名園　～ボタニカルなフィールドミュージアムとして～

癒しの空間を演出する 花壇広場

グリーンセンターは、開園からすでに半世紀以上もの時が過ぎ、今年の11月で57周年を迎えます。これまで、地域そして川口の自然・歴史・文化的価値を表出する象徴として、多方面からの高い評価を得ています。

現在も、特に休日などには、わんぱく広場、ミニ鉄道の人気スポットを中心に、多くの子供連れ家族の来園で賑わっている風景を目の当たりにします。加えて、花と緑を満喫する空間においては、心身の憩いの場としてくつろぐ人々の、微笑ましい姿が目に飛び込んでまいります。現在、園内の再整備事業が進められていますが、2022年2月には、芝生広場(兼防災広場)、昆虫の森、冒険の森(フィールドアスレチック)、ちびっこ広場、いきいき広場を新設。園内北側の一部がリニューアルオープンしました。

2000年にノーベル経済学賞を受賞した、経済学者ジェームズ・ヘックマン教授は、子供たちがウエルビーイングな生活を送るためには、「非認知能力」を育成することが重要であると提唱しています。当園に新設の自然や動植物・生き物に直接関わることのできる体験活動型施設は、益々、次世代を担う子供たちの非認知能力を育む、「探究学習」の実践の場としての役割を発揮することでしょう。

グリーンセンターは、「たな　ボタニカル」な・思いがけず良いことが起こりそうな!フィールドミュージアムとして、益々磨きをかけています!

探求学習の場 冒険の森

川口市立グリーンセンター

公園情報

開園	平成42年(1967)11月1日
所在地	川口市新井宿700
公園面積	約150,000㎡
公園内施設	花壇広場/滝・大噴水/大集会堂/日本庭園茶室 大芝生・白鳥の池/山野草園/芝生広場/昆虫の森 冒険の森/ちびっこ広場/わんぱく広場/ミニ鉄道他

アクセス

お車:「東京外環自動車道川口中央インターチェンジ」より約5分
※無料駐車場620台駐車可能

電車:「SR新井宿駅1番出口」から徒歩10分

バス:JR京浜東北線川口駅東口7番
「戸塚安行駅行き」「東川口駅南口行き」
グリーンセンター下車他

川口をふるさとに

4 スエコザサとオタクサ

—牧野富太郎とシーボルト—

波多野 純　日本工業大学名誉教授

スエコザサ

NHKの朝ドラ「らんまん」（2023年度前期放送）は、植物学者・牧野富太郎（1862~1957）をモデルにし、その夫婦愛は観る者を温かく包んでくれた。実は彼はもう少し危ない人物であった、とも言われるが、そこはドラマと言うことで・・。

植物学者の喜びのひとつに、自分が新種として発見した植物に学名を付けられることがある。彼が命名した植物は、1500種を超え、それは後世まで語り継がれる。愛する妻の名「壽衛（スエ）」を付けた「スエコザサ」。地味な植物であるのがとてもいい。

牧野の植物画の魅力

牧野の植物画は、その正確な描写を越えて、見る者を楽しくワクワクさせてくれる。1枚の植物画が、完結した絵画としての魅力にあふれている。中央に全容を描き、周囲に花や種などの細部が加えられている。また、植物の一生が、時間軸を追って描かれている。

「神は細部に宿る」、どのような縮尺を使えば、どこを拡大すれば、その植物の本質に迫れるか、丁寧な観察を踏まえた描写である。それを正確に印刷するために石板印刷技術まで習得したと言うから驚きである。

最近、牧野の植物画はキュービズムである、と言うおもしろい指摘を聞いた。確かに、ものを分解し再構築することにより本質をつかみ取る姿勢は、キュービズム絵画と共通する発想である。

オタクサ

愛する人の名を、発見した新種植物の学名とする、それは牧野に始まったことではない。シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold,1796~1866）も、愛する日本人の女性・楠本滝（タキ）の名を、アジサイに付け「オタクサ（otaksa）」とした。残念ながら新種ではないことが後に明らかとなり、現在この学名は使われていない。

楠本滝は、長崎丸山の遊女・其扇（そのぎ）とされるが、出島に出入りできる日本人女性は丸山遊女に限られたため名義を借りたとも言われる。また、シーボルトとの間に生まれた娘イネは、日本最初の産婦人科女医として知られる。

シーボルトは、ヴュルツブルク（現ドイツ・バイエルン州）に生まれ、1823年に長崎出島オランダ商館の医師として来日し、1828年のシーボルト事件で国外追放となるまでの期間、鳴滝塾を設け日本人に西洋医学を伝授するとともに、積極的に日本のあらゆる分野の情報を収集し、オランダへ報告した。オランダ商館長の江戸参府にも同行した。『日本動物誌』『日本植物誌』など自然史分野の業績ばかりでなく、大著『日本』には、日本の民俗、町家や農家の様相も記録されている。彼が蒐集しオランダへ送った品々は、きわめて多岐に及ぶ。動植物の標本・剥製ばかりでなく、生活用具や生業用具、さらに建築については模型を日本の職人に制作させて持ち帰っている。

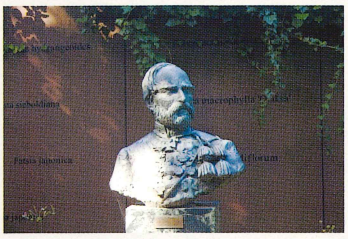
シーボルト植物園

オランダのライデン市には、世界最古の大学のひとつであるライデン大学があり、その附属施設にシーボルトの名を冠した植物園がある。シーボルトの胸像も飾られ、日本庭園を備えたとても魅力的な植物園である。そこを訪ねると、シーボルトが、日本から持ち帰った植物、それの子孫などが植えられ、来歴が分かるように説明板が付けられている。

また植物園のそばの運河沿いに、彼の旧宅を活用した日本博物館・シーボルトハウスがあり、蒐集品の一部が展示されている。

彼の膨大な蒐集品の多くは、ライデン国立民族学博物館に収蔵され一部が展示されている。食器など日常的な生活用具を見ても、その質の高さから、日本の職人の技術を高く評価し優品を選んで購入したことが伝わってくる。佐渡金山の断面模型は、採掘の構造から労働者の苦労までが、丸ごと理解できる。

シーボルト植物園日本庭園入口


シーボルト胸像

日本博物館・シーボルトハウス

シーボルト植物園日本庭園
彼が日本から運んだ植物とその子孫が植えられている

運河沿いの朝市でもアジサイが売られている

川原慶賀とシーボルト

シーボルトのいずれの著作にも、魅力的な図版が添えられており、読者の理解を助けてくれる。その多くはオランダ人の絵師によって描かれたが、そのもとを描いたのは出島絵師・川原慶賀と彼の工房である。慶賀は、オランダ人画家から西洋画の技法を学んだとされ、植物画や動物画の細密描写は秀逸である。

慶賀は「シーボルトの眼」と紹介されることが多いが、それだけではなく歴代の商館長などの要請にあわせて多様な絵を描いている。

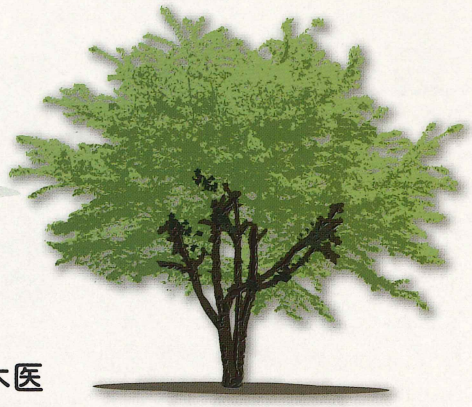
「出島図」と呼ばれる出島の全体像を俯瞰した絵は、世界に流布した。「蘭館絵巻」は出島での暮らしを描いている。食事風景を描いた絵によると、畳の部屋にテーブルと椅子を置き、オランダ人は靴のまま、日本の役人は白足袋、マレー人の下僕は裸足と分かりやすく描き分けている。

私は、歴史的な建物の保存・修復・復原を生業としており、2000年まで長崎出島オランダ商館の復原（第1期）を担当させていただいた。その仕事の中で、慶賀の絵に助けられたことは枚挙に遑がない。

牧野富太郎と安行

牧野は戦時中に安行の地を訪れ、好樹園の園主・中田億右衛門の案内で植木屋を巡っている。その礼状が、「樹里安だより、2006年12月、vol.20」に掲載され、「御蔭を以て有益な研究材料を得まして大いに喜んで」と記している。豊かな植物に恵まれた安行訪問は牧野にとって大きな収穫であったに違いない。さらに、送付を依頼した「サッカウ（サッコウフジ・ムラサキナツフジ）」の催促に、「途中で枯死しはせぬかと心配」と配慮の言葉を添えている。

安行界隈の 希樹・珍樹を探る！



タブノキ（*MachilusThumbergi*）

樹高 約12m　幹回り 4.1m
神明社公園　川口市安行領家381

川澄 寛國　樹木医

川口緑化センター・樹里安から真っすぐ西へ向かって坂を上り、突き当りを右折。埼玉県花と緑の振興センターへ向かう通りを北に少し行くと左側に「神明社公園」がある。およそ千坪の広場となっている公園の北西の隅にこんもりと茂った高い木がある。これが今回話題とする不思議な樹形のタブノキである。木の下には何やら神社の祠のような建物。タブノキの西側は土が盛られ小高くなっており熊野信仰の石碑が並んでいる。ここは昭和54年（1979年）に川口市の公園となったとのことであるが、どうやら以前は神社であったようだ。タブノキは全国の神社の森などによく見られる樹種であることから、これは由緒ある木に違いないと思い、川口の文化財に精通しておられる方にお願いして、この木を含めて、ここの来歴を調べていただいた。『新編武蔵風土記稿』をはじめとする様々な古文書を調べていただいた結果以下のようなことが分かった。

神明社公園

ここは元、神明社という天照大神を奉る神社であった。創建は貞和元年（1345年 南北朝時代）。明治６年、領家村の村社となる。江戸時代の熊野信仰からか、熊野三社の石碑が建てられている。神社の別当、不動明王を本尊とする神明院という寺が境内にあった。創建は神社と同じ貞和元年（1345年）。江戸時代は一時寺子屋を開いていたようだが、明治２年廃寺。（廃仏毀釈による）

神明社 一間社流 見世棚造
安土桃山～江戸期の建築

樹木に関するものは、明治８年の当神社に関する記述がただ１行、"楠の老樹あり"と。埼玉県が編纂した『武蔵国郡村誌』の中に見られるのみであった。これは樹齢から考えて、この木のことではないであろう。ただし、ここに"楠"の漢字が使われていたことが気になる。これは "くすのき" と読み、そしてこの木はクスノキだったのだろうか？

熊野三社　天明２年（1782）神明院８世永善が勧請
石の祠には 石工川口宿小川長四郎の銘がある

タブノキ（MachilusThumbergi）は、クスノキ科の常緑高木で照葉樹林の代表的樹種のひとつで、クスノキ（Cinamonam Camphora）に似てはいるが学名の通り属が異なる。
図鑑によれば、日本の本州以南、朝鮮半島南部、中国、台湾、フィリピンに分布し、東北地方南部の海岸寄りから九州、沖縄、八丈島、小笠原諸島の森林にも自生する。樹高は約 20 メートルから 30 メートルにもなる。日陰に強く、潮風にも比較的耐えることから、海岸近くの防風の機能を有する樹種（防風樹）として知られる。材は建築、家具など多岐に使われるが、古くは丸木舟を作る木とされ、船材に多く使われていた。花期は４月から６月で、黄緑色の花を多数咲かせる。古くから樹霊信仰の対象とされ、日本各地に巨木が残っており、神社の「鎮守の森」によく大木として育っている。ちなみにタブノキの花言葉は「鎮魂」「鎮守」。とある。

タブノキの葉と冬芽

この公園のタブノキは遠くから見るとこんもりと不思議な形をしている。どういうわけか、幹が北の方向に垂直から 30度ほど傾いているのである。見る方向によっては、一見一本の太い幹の木のように見えるが、近付いて見ると、大きな２本の幹が寄り添って立ち上がっており、共に同じように傾いている。根元周囲には多数の太い根が張っている。
言い伝えによると、この木は２代目とのことだが、通常の実生や苗木を植えられた木では見られない不思議な根元の樹形となっている。傾いている原因はともかくとして、どうしてこのような不思議な立ち上がりの姿なのだろうか。

この樹形の謎を解くカギとして、思い浮かぶのは、先ほど気になっていた明治８年の "楠の老樹あり" の記述である。"楠"の字は、くすのきさんとして苗字にも使われているが、クスノキは、樟脳を取る木であることから正しくは "樟" と書く。"楠" は中国伝来の漢字だが、調べてみると中国ではタブノキを"楠"と書くようだ。
現在我が国では、タブノキの漢字として "椨" の文字が使われている。いつのころから使われているのかは不明だが、この字は日本で作られた国字である。明治の初期、まだ正確、厳格な植物の分類や命名がなされていない時代である。タブノキはイヌグスとも呼ばれ、クスノキによく似ており混同されていたこともあるようだ。そんな時代、タブノキが "楠"と書かれてもそれほど不思議ではないだろう。いや、むしろ、中国からの漢字の意味が正確に日本に伝わっていたと考える方が正しいのかもしれない。明治８年にこれを記述した人物はタブノキの意味で "楠"の字を使ったのだと。すると、ここにはもともとタブノキがあったのか？

これは推測だが、熊野の地方には古来より大きなタブノキが多いこと、なおかつ、この神社は熊野信仰が篤かったことから、初めからクスノキではなく、タブノキを選んで植えたのではなかろうか。そして明治８年の木はクスノキではなく、正しく実はタブノキであったと考ると、傾いていることは別としても、この木の不思議な樹形の説明がつくかもしれないのだ。つまり、現在のこのタブノキは、明治８年にあった老齢のタブノキが何らかの原因で地上部が失われ、残った切株或いは根から自然と新しく芽吹いて立ち上がったものと考えられるのだ。もしそうだとしたら、確かにこれは２代目であるし、この木の地上部は樹齢100年程度にしか見えないが、根を含めたこの木の本当の年齢は数百年となるのだ。切株から芽吹いた幾本かが成長し、近いもの同士が癒合して現在までに２本の太い幹となっている。今後も順調に成長していけば、ゆくゆくはこの２本も根元で癒合し、やがて一本幹の大木となるのであろう。熊野信仰といえば、「復活」「再起」「再出発」を象徴するする八咫烏が思い浮かぶが、このタブノキもまさしく熊野信仰そのもののような存在ともいえそうだ。
このタブノキは、今のところ川口市の指定保存樹木となってはいないようだが、土地ゆかりの歴史ある樹木として大事にしていきたいものである。

タブノキの根元の立ち上がり

日本人の自然観と植物

昔から日本には、自然を愛くしみ自然と共に暮らしてきた伝統と文化があります。春夏秋冬、四季折々の移ろいがあり、日本人はこの自然の変化を巧みに捉え、24の季節として現しています。「二十四節気」です。

さらには、古来中国から伝わった5つの季節の節目を、本国日本の風土に融合させ、一月七日「人日(じんじつ)」、三月三日「上巳(じょうし)」、五月五日「端午(たんご)」、七月七日「七夕(しちせき)」そして、九月九日の「重陽(ちょうよう)」と。江戸幕府により「五節句(供)」として整えられてきた歴史があります。

人日：七草の節句

正月7日の朝に、「**七草**粥」を食べる風習がいまでも残されています。その起源はやはり中国にあります。正月元旦を鶏の日、2日を犬の日、等々。そして7日を「人の日」としたところから1月7日を「人日(じんじつ)」と呼ぶようになりました。日本に伝わり、平安時代には宮廷の儀式として、さらに、江戸時代には五節句の一つとして、無病息災を願うものとして民衆の間に定着しました。

粥に入れる若葉は、**セリ、ナズナ、ゴギョウ(ハハコグサ)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ(タビラコ)、スズナ(カブ)、スズシロ(大根)**の七種が、現代では一般的です。

正月のご馳走で疲れた胃腸を休め、野菜が不足する冬場に栄養補給をするという効用が見られます。

上巳：桃の節句

三月三日の「ひな祭り」。お雛様を飾り、古から女子の成長と幸せを願うものです。

こちらの行事も古代中国の「上巳節」という、三月の最初の巳(み)の日に、川でケガレを清めるという風習が起源だそうです。

日本に伝わってからは、貴族から武士そして庶民の間に広まり、雛人形を並べて「**桃**」の木を飾る江戸時代からのスタイルの祭りが定着しました。

「**桃**」は、中国で悪魔を打ち払う神聖なもの、長寿をもたらす力を持っているものとされていたため、ひな祭りで飾られるようになり、そこから、ひな祭りを「**桃**の節句」というようになりました。

この節句の縁起の良い食物として、赤・緑・白3色の「菱餅」があります。それぞれ、花・大地・雪を。さらに厄除け・健康・子孫繁栄を表していると言われています。

端午：菖蒲の節句

五月五日は「こどもの日」。もともとは、男子の祭りで、武者人形を飾り、鯉のぼりを立て、**笹**の葉で細長い団子を包んだ粽(ちまき)や**柏**の葉で包んだ「柏餅」を食べお祝いをします。

端午の「端(はし)」は、始め・最初という意味。「午」は午(うま)の日のことで、端午とは、五月最初の午の日をさします。午と五が同じ発音であったことから、奈良時代以来五月の五日に行事を行う習わしが定着しました。

一方、江戸時代に入ると武家の間で、「菖蒲(しょうぶ)」の音が「尚武(しょうぶ)」・武を重んじることと同音であることから、家の後継ぎとして生まれた男子の息災と一族の繁栄を祈る重要な行事となりました。

菖蒲には、昔から邪気を払う効用があるといわれ、家の屋根や軒先に刺したり、酒に浸し**菖蒲**酒として飲んだり、**菖蒲**を浮かべた風呂(**ショウブ湯**)に入ったりするところから「**菖蒲の節句**」とも呼ばれています。

七夕：七夕の節句

七月七日に行われる七夕(たなばた)祭り。星祭とも呼ばれる行事で、夏の夜空のもと、**笹竹**に皆々の願い事を書いた短冊を結びつけ祈るものです。あわせて、切り紙細工や吹き流し、瓢箪や杯などの作り物も飾り付ける「七夕飾り」は江戸時代から盛んになりました。

笹は昔から、虫よけの効用があるとともに邪気をも払うとされてきています。

本来この祭事は、「牽牛」と「織女」二つの星の出逢いを祈る中国渡来の習俗と、古来日本の「棚機津女(たなばたつめ)」の伝説が交じり合い、江戸時代に「七夕の節句」となったものです。

この節句の行事食に、天の川や織姫の織り糸に見立てた「そうめん」があります。そうめんの原料の小麦は、毒を消すという言い伝えから、健康を願い食べられるようになったという説があります。

重陽：菊の節句

昔から中国では、奇数を縁起の良い数として「陽数」と呼んでいました。その最大の奇数である九が重なることから、九月九日を「重陽」と呼び吉祥の日としてきました。人々の間でこの日に高いところに登り菊酒を飲む習わしが生まれたそうです。

「**菊**」の花には古来より不老長寿の効用があるとされています。重陽の行事は、飛鳥時代に日本に伝わり「**菊**花宴」という宮廷行事に。平安時代には重陽節という公の儀式となり、さらに江戸時代に五節句の一つ「**菊**の節句」として民間に広まりました。

この秋の節句で雛人形を再び飾る風習があります。桃の節句で飾ったものの虫干しを兼ねて飾り、健康、長寿、厄除けなどを願いました。後の雛(のちのひな)。大人のひな祭りとも呼ばれ、江戸時代に庶民の間で広まり親しまれました。

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

ジュリアン
樹里安

発行 令和6年3月

公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

048-296-4021

https://www.jurian.or.jp/